外材を語る

南洋材への期待

語る人　二瓶木材株式会社社長　二　瓶　　守さん

聞く人　北海道林材新聞社旭川支社　上　畑　正　和次長

本道における南洋材の位置

―― 本日は，この道のエキスパートである二瓶社長さんに“南洋材のあれこれ”といったことでお聞きしたいと思います。

外材のシェアが高くなっており，南洋材も最小限の量は必要と考えるが，日本とりわけ北海道の位置，役割といったことについてお聞きしたい。

二瓶　南洋材は，全国で1400万m³から1440万m³輸入されているが，北海道には100万m³程度，全国比で7～8％位になりましょう。木材の使われ方が合板から削片板に変わっていった欧米なみの条件がなければ，南洋材のウエイトは落ちないでしょう。また，南洋材の供給が下がって価格的に立ち打ち出来ないような状況にならないかぎり，輸入材の主流から外れることもないし，北海道にとって，7～8％から4～5％になっても南洋材は必要でしょう。

一方，北海道では，カラマツを活用できると期待していたが，まだ5～6年先でなければ商品になりそうもなく，継続的にも造林されていないので，果たして商品になるか難しい。今後は大量生産，大量消費の形にならないから，限られた資源を有効に使わねばならないし，カラマツが用材資源として埋もれるとは考えないが，当面，頼りになる材料ではない。

そうすると，当然，南洋材，ソ連カラマツ，米材が対象になろうが，南洋材の合板としての材料的価値が高いので，日本の消費者が削片板になれて，これを使うようにならなければ，現状が急に変わるとは思われない。

南洋材も大木が少なくなっている

南洋材の需給

―― かって南洋材の多くはフィリピンからであったが，産地の供給地図も代わってきているようです。産地の概況はどうなっておりますか。

二瓶　昨年の産地べつ供給実績は，インドネシアが300万m³，サバとサラワクが各1000万m³，フィリピンとその他諸国が各100万m³，合計2500万m³になっており，消費実績では日本が約1400万m³，韓国と台湾が430～450万m³，その他（中国を含む）が200万m³程度，合計で2470万m³となっております。

一方，本年の産地べつ供給予想は，インドネシアが100万m³，サバ950万m³，サラワク1150万m³，フィリピン120万m³，その他が180万m³で，合計では昨年同様の2500万m³となっております。これに対して，国べつの消費予測は，日本が1350万m³，韓国が470万m³，台湾が500万m³，中国を含むその他が200万m³，合計2520万m³になろうと考えられています。以上から，わかるように，サバ，サラワクの供給量が圧倒的に多いわけです。

神経質な産地事情と今後の課題

―― かっては，インドネシアの生産量が多かったが，現在では合板工場を沢山作り，工業化指向，.丸太での輸出が減少しているが，このような状況から，日本の原料調達は困難になってきませんか。

二瓶　当面，サバ，サラワクは工業化政策をとる傾向にないので，現状の供給は続くでしょうが，サバは昨年をピークに下降ぎみです。サラワクは余力はありますが，大手の生産者が数社しかないので，出材はコントロールされ他国の出方を背景に相当思い切った価格政策をとるでしょう。

一方，国際的に熱帯林の資源保護の世論は高まりましょうし，世界の景気も回復してきているので，供給不足も高まりましょう。

このような背景から，資源供給は神経質な動きになると言われています。

したがって，これを補うには，思いきって樹種を低質材まで使える体質にすること，ソ連産広葉樹・日本の未利用広葉樹・カラマツを含めた針葉樹をいかに活用してゆくかが，今後の課題でないでしょうか。

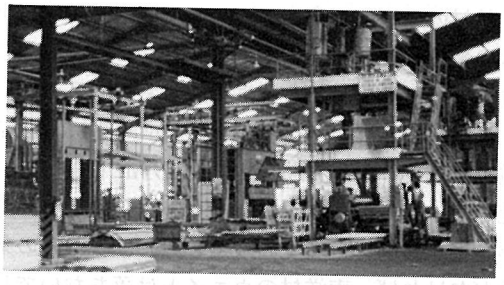
原産地の工業化政策

―― 現地の工業化政策にともなう工場数の現況はどうなっていますか。

二瓶　インドネシアは，本年4月から明年3月までに150万m³の丸太輸出枠を設定していると聞きますが，現在稼働中の合板工場が70工場あり，建設中が49位あるようです。したがって，国内消費原木も不足して，サバ，サラワクから丸太を入れたい状況で，来年以降は原則として丸太輸出を停止する可能性があります。

―― インドネシアは，近い将来120工場稼働することになるが，住民の生活権を守るためなのでしょうか。

二瓶　ジャワ島に人口が集中しており，この人口再配置を考えたのと木材工業化が期を一にしたことでしょう。



急速に工業化が進む木材利用産業

―― ジャワ島の人口がボルネオに移住するのでしょうか。

二瓶　そうです。木材工業化をして人口分散を積極的に実施する者には，融資の条件や山林売払いの条件を優遇している。

原木を売るぐらいの外貨を合板輸出で獲得し，国民の生活手段をつくり，人口再配置を可能にするという３つの国家目標にそうわけです。

―― 今後の設備投資の方法とその可能性はどうなのでしょうか。

二瓶　フランスの国立銀行と政府及び民間の機械・電気関係企業がフランスの合板プラントを使ってもらうため融資をするなど，海外の融資によって設備しているのが多いようです。

―― 将来，インドネシアの120工場がフル操業した場合，世界の合板生産量とのバランスをどうみているのでしょうか。

二瓶　アメリカまでの海上運賃は，台湾とm^3当たり２ドルしか違いませんので，同じ水準の製品ではインドネシアにかなわないという見方もある。

したがって，台湾では技術供与してインドネシアで合板を作り，これにドアスキン，ファンシーなど再加工してアメリカ，欧州に売っている会社もある。日本にも現在25％の関税を20％に下げさせて売込みたいと考えているようです。

関税の問題は，南洋材というよりアメリカとの関係で生じたものですが，これが東南アジアに影響を与えましょう。

インドネシアのプラントは４×８サイズで，型枠合板は単位当たりの価格が安いので，関税だけで解決する問題でないし，120工場が対象とする材料はむずかしく，正常な生産継続には時間がかかるでしょう。

―― 日本の合板との関係はどうでしょう。

二瓶　日本は12mm厚，３×６サイズが主流で，型枠合板はm^3当たり180ドルから200ドル程度ですから，彼等の生産コストに合わないでしょう。

―― 合板の今後の見通しはどうですか。

二瓶　昭和48年のピーク時で，丸太の使用量が2400万m^3強，56年1612万m^3，57年1400万m^3で，日本自体がかなり落ちていますが，製材と合板原木の比率では，かっては半々だったものが，製材のシエアが55年では33％，56年には30％，57年には20数％に，製材の落込みが大きく，合板の生産量は増えています。

―― 最後に，今後の我が国の原料輸入の課題と言えば何でしょうか。

二瓶　徐々に木材の価値変化が起き，経済の流れにどの様にして順応してゆくかがポイントでしょう。各国の国民の生活ニーズが，手段として工業化するのか，素材輸出するのか，原木価格も基本的には，需要と供給の経済原則に従って決まるので，一次的に特定の要因によって左右されても高値安定が継続することはないでしょう。

（文責　編集部）